

いぬはりこ

ART WORK

—— 色鮮やかに画面を切り取る
蜷川実花さんの世界

—— やさしい世界観で人気の絵本作家
刀根里衣さんの作品

CREATOR'S VOICE

鈴木マサルインタビュー

豊かに彩る
日常生活を
テキスタイルで

子どもとアート

—— アートで感じる「いいな」が
子どもの脳力を育てる

指導：女子美術大学 前田基成教授

—— 「感じること」と「表すこと」を繰り返して
豊かな表現力を身につける

指導：椋山女学園大学 磯部錦司教授

CREATOR'S VOICE

鈴木マサル
インタビュー

テキスタイルで

日常生活を豊かに彩る

人の暮らしの傍らに、ひっそりと寄り添う布製品(テキスタイル)。その色彩や柄、素材は、生活に安らぎや楽しみを与えてくれます。魅力的な作品を生み出し、世界中から注目を集めるテキスタイルデザイナー、鈴木マサルさんにお話をうかがいました。

色を決めるときに

重要なことは

どういう場所で

使うものなのかということ

——ジャケットとのコラボレーションでラグをつくっていただきましたが、どんなふうにデザインが決まっていたのでしょうか？

カラフルなプリントをしたラグというのも選択肢にはあったのですが、僕のほうから、あまり子どもっぽくなく、一般の家庭でも使えるようなものはどうでしょうと提案

をしました。日本の子どもたちはみんな、地べたに座ったり寝転んだりしますよね。だからラグの表面も、のっぺらっとしたものがより触ったときにいろいろ質感があったほうがいい。それには織り物が合います。織り方や材質が決まり、それからデザインに取りかかっていきました。今回のタイトルは「HIROBA」(広

場)で、森の木の上にいるリスや鳥たち、草原にいるヒツジやウマ、サファリにいるキリンやゾウというように動物たちを三つに分けて、それぞれの「広場」にしているんです。

——色はどうやって決めるのでしょうか？ 子どもの周辺のものということ念頭に入りますか？

もちろん多少は考えますが、大人向け、子ども向けということではなく、どういう場所を使うものなのかというほうが僕は重要だと思っています。例えば、福井県の第二さみどり幼稚園のインテリアデザインに関わったのですが、乳幼児室の天井の絵は、子どもが寝る前に見るものですよ。派手な色は興奮して目がさえてしまうだろうと、そこでは薄い色を選びました。大人用でも、元気な気持ちにさせたい時は派手な色を使いますし、子どもでも落ち着いたら気持ちにさせたい時には落ち着いた色を使います。元気でいたい子どもばかりではないと思います。

——鈴木さんはどんなお子さんでしたか？
僕自身、そんな活発な子どもじゃなかったんです。

絵を描くことは物心ついた時から好きで、絵に関する小さい頃の記憶はけっこう残っています。幼稚園でみんなが怪獣を描いたのですが、僕は街に現れた怪獣を描いたので、ビルに窓をたくさん描かなくてはいけなくて、隣の子は山と怪獣なので、すでに終わっていて、「しまった……」というような記憶だったり。勉強やスポーツは飛びぬけてできたわけではなく、絵を描いたときだけは褒められたので、そのまま美大に行っただけという感じです。

——子どもの頃からカラフルな色で描いていましたか？

実は色は、美大を卒業するまでほとんど使えない人間でした。本当に赤、青、黄色、白、黒ぐらいしか使えず、美大で出会った先生のもとで仕事をするようになってから勉強して覚えていきました。先生に「色感というのはどれだけ色を見てきたか、どれだけ色を使ってきたかっていう、ただそれだけの問題だから、気になる色を切り抜いて部屋じゅうに貼っておけ」といわれ、雑誌できれいだと思った写真や、ポストカードをいっぱい貼りました。それを毎日見ているうちに、ある時、色が自然と使えるようになったんです。だから色感っていうのは、生まれつきということはないと思います。

PROFILE

鈴木マサル (すずきまさる)
1968年、千葉県生まれ。テキスタイルデザイナー。東京造形大学教授。多摩美術大学美術学部卒業後、粟辻博デザイン室に勤務し、1995年に独立。2002年にウンビアットを設立し、2005年から自社企画ファブリックブランド「OTTAIPNU (オッタイビヌ)」の主宰となる。また、国内外のメーカー、ブランドのプロジェクトに参画している。

HIROBA シリーズ

大サファリ ※左写真
サイズ：182×364mm
色：グレー
そうげん
サイズ：182×182mm
色：ブラウン
もり
サイズ：182×182mm
色：黄緑

質感のある
織物です！



テキスタイルデザインは情報ではなく、
雰囲気だったり、気分だったり、そういったところをつかさどっている



—— 布製品のテキスタイルデザインと、広告やポスターなどのグラフィックデザインとの違いはどんなところにありますか？

グラフィックデザインというのは、情報をつかさどっているものだと思います。飲み物のペットボトルには、中身を示す絵や言葉が貼ってありますよね。もしそれがなかったら中身がわからずに飲むことができません。それがグラフィックデザインです。テキスタイルデザインには情報は一切なくて、雰囲気だったり、気分だったり、そういったところをつかさどっているんじゃないかと思います。布って人間が一番近い存在で、24時間体に触れているものです。そして目の前に一枚の布があったら、これを何にしようか、洋服かカーテンか……と考えると思えます。紙や木はそこまでの気持ちはきつと起こらない。だから布って一種の可能性だと思っていて、そういうところが魅力じゃないかと。

—— テキスタイルでは、素材、柄、色の何が一番こだわりを持っていますか？

素材を考えるのも好きですが、素材と色柄のどちらが好きかといえば断然、色柄です。もちろん、色柄がのるものとして、どんな布でもいいというわけではなく、こういう素材の織り物であってほしいというのはあります。そして色と柄のどちらか、と聞かれたら色ですね。今はデザインも、色を中心に考えるようになっていきます。仕事ではそうはいきませんが、オリジナルで生地をつく

るときは、モチーフは何でもいいやと思ってしまいうほど、色には思いがあります。よくいうんですけど、虹を見て気分が悪くなる人はいませんよね。あれが白黒のグラデーションだったら不吉な存在になったかもしれない。きれいな色は、見たら単純に気持ちが明るくなっていくものです。そうした色というものを、僕は信じていきたいなと思っています。



東京都渋谷区にある、鈴木マサルさんの仕事場にて。

日常の中のアートとして、感覚が優れた人の仕事がそばにあるのはいいことだと思います

—— 日常、子どもがアートに触れることについて、保育者へのメッセージを含めてお考えをうかがえますか。

僕が感覚が優れた人の仕事があるそばにあるのはいいことだと思います。例えば、ジャクエツさんでつくった深澤直人さんデザインの遊具がありますよね。大人が見ても素敵だなと思うような造形の優れた形が子どもにも人気があることを知ると、ああ、子どもってよくわかっているなと思います。それと同時に、気が抜けないなと思うんです。色に関しては、日常の中に色が多ければいいとは思っていません。子どもがいる空間に、すごく色が溢れている時期があってもいいし、そうでない時期があってもいい。でも無難な白やベージュといった色ばかりでは、あまりよい結果は出ないんじゃないかと思っているので、自分がきれいだなと思ったものを子どもたちのそばに置いてあげればいいと思います。壁をピンクにしたっていいと思いますよ。

—— 子どもたちが絵を描くということについてはどうでしょう？



2017年の展覧会「鈴木マサルのテキスタイル展 一目に見えるもの、すべて色柄—」(写真左上)、アルフレックスとのコラボ作品(写真中央上)、日本のベビー子供服ブランドとのコラボ作品(写真中央下)。

iPadでデジタルの絵本を見て育った子には、手描きのラインが不快に見えるかもしれないと考えた時期もあるのですが、やっぱりそうではないと最近は思っています。だから僕も最終的には絶対に手描きで描きます。絵を描くことや、デジタルでなく実際の自然物を触るといったことに、子どもたちも何か感じるものはあるはずですよ。絵を描くなら手軽なクレヨンよりも、ちょっと後片付けが面倒くさいもののほうがいいんじゃないかな。絵具を手や指につけてベチャベチャやるとか、筆で絵

の具をザッと塗って水の広がりを感じるとか。絵を描くことって、人間にとって生まれつきもっている根源的な行動ではないかと思うんです。形をきれいに描くとかじゃなく、ただ何かに塗る、線を引くことに喜びを感じる。そして、「うまく描けたね」というより、「たくさん塗ったね」といつてあげる。面倒くさいかもしれないですが、面倒くさいことほど情報量って多い気がして、そういう情報量が多いものを提供してあげるといのが、いいんじゃないかなと思っています。



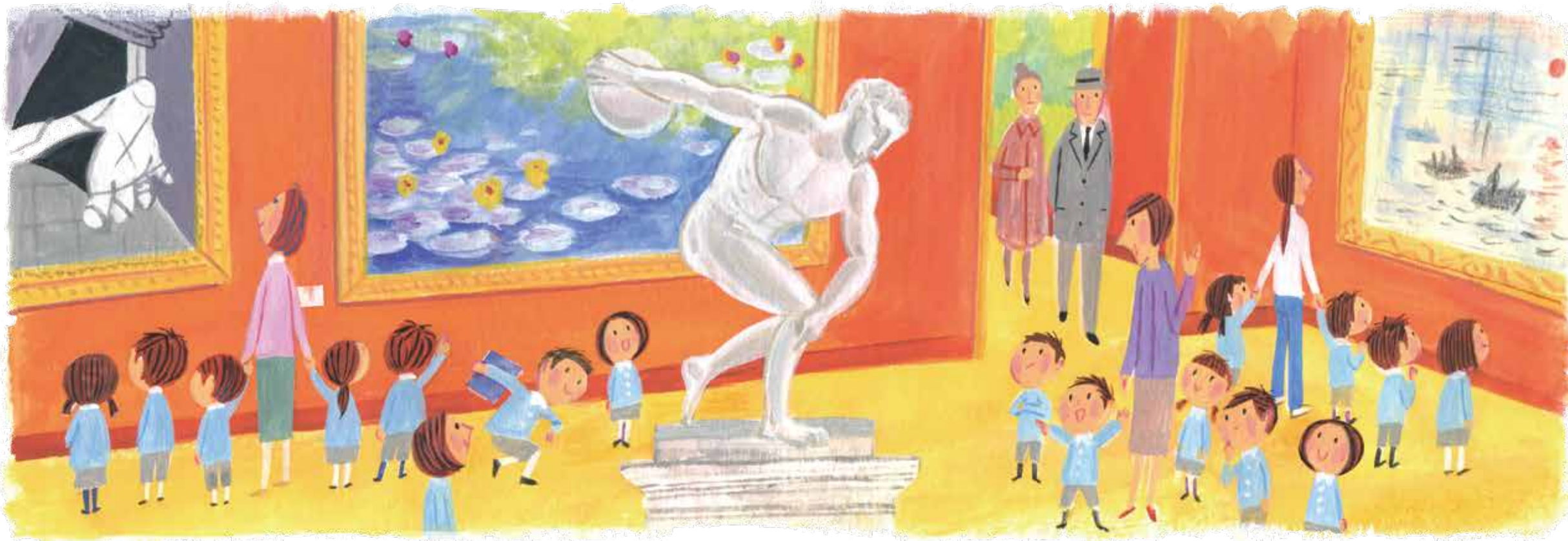
鈴木さんがデザインに関わった乳児棟の保育室(福井県敦賀市第二さみどり幼稚園)。子どもの視線を考えて、天井と柵にイラストを施した。

アートで感じる

「いいな」が

子どもの脳力を育てる

子どもの頃から本物のアートにふれるとよいといわれますが、アアートが子どもたちに与える影響は、どのようなものなのでしょう。また、美術館や身近なところにあるアート作品とどのように出会わせてあげることができるのでしょうか。



指導 前田基成先生

臨床心理学者。女子美術大学大学院美術教育研究領域教授。国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所心身医学研究部客員研究員。共著に『エグゼクティブは美術館に集う』（光村図書出版）『美術科教育の理論と実際—美術科の教員を目指す人のために』（日本文教出版）などがある。

「美」を感じる メカニズム

「美しい」とは、いったいどのようなものなのでしょう。実は、人が「美しい」と感じるものには、脳のある部分を刺激する要素が含まれていることが多いのです。

近年の研究に、小鳥のヒナがさえずりをどのように学習するかを調べたものがあります。音を遮断した箱の中で育てられたヒナは、繁殖期がきてもさえずることをしません。しかし、スピーカーで仲間の声を聞かせて育てると、さえずることができるようになります。他の鳥の声ではだめでした。これは、自分と同類の声を聞くと、それが刺激となり、「学

習しなさい」という脳のメカニズムが働くからではないかと考えられます。この遺伝的に仕組まれているプログラムを生得的解発機構といいます。生まれながらにして持っているシステムが何らかの刺激によって解き放たれるという意味です。また、オランダの学者ティンバーゲンの研究で、セグロカモメのヒナが母鳥の黄色いくちばしにある赤いはんてんをつくと、母鳥はヒナのくちばしに餌を入れるのですが、そっくりにつくった模型のくちばしでも同じことをすることがわかりました。細長い黄色い棒に赤いはんてんや赤い線をつけたものでも同じ結果でした。セグロカモメのヒナは、形ではなく赤と黄色の色に反応してしまうのです。もし、セグロカモメの世界にギヤラリーがあったら、おそらく成鳥の肖像画と赤と黄色の抽象画は、「なんだかわからないけど、この絵がいんだよね」と人気になるでしょう。人が「美しい」と感じるときも、これと同じようなことが脳の中で起こっています。色や形を大まかに判断するだけなら、情報は視覚野(図1)というところで処理されますが、ある特定の条件のものと見ると、脳の神経を通して側坐核や線条体など

の「報酬系」(図2)といわれる領域が活発に動き、心地よさを感じます。人は、これを「美しい」という言葉で表現したのでしょう。例えば、左右対称や黄金比(約5対8の比率)などがそうです。優れた作家は、その特定の要素を意識せずにつくってしまうのです。

アートは 共感する力を養う

手をグー、チョキ、パーの形にするときは、運動を命令する運動野(図1)が働きます。ところが、自分で動かさなくても、他人がグー、チョキ、パーをするのを見るだけで反応する神経細胞があります。ミラーニューロンです。自分を他人の中に投影する、脳の中の鏡のようなもので、実際に動いていなくても、脳の中では体験しているのです。このミラーニューロンの働きにより、他人の気持ちを読んだり、共感したりすることができるようになると考えられます。けがをしている人を見て痛いだろうとか、高校野球を見て選手は暑いだろうと思うことも、共感のひとつです。

プロの写真家は、ある一瞬を切り取って作品にするわけですが、例えば戦地の焼け野原に立っている子どもの写真を見ると、私たちはこの子はどんな思いで野原を見ているの

うか、どうしてこのような状況になってしまったのだろうかといった考えが生まれます。

共感とは、作品を見ている人に、そこに描かれている以上の世界を広げてくれるのです。相手に対する共感の能力を養うということは、情操を育てる重要な要素のひとつになるでしょう。

子どもとアートの 架け橋に

子どもたちと、美術館や園に飾ってあるアート作品を見るときは、作

品について話したり、問いかけをしたりするとよいでしょう。子どもたちは、現在のことは向き合えませんが、過去や未来のことを考えるのは苦手です。「この絵のうさぎさん、これからどうなるんだろうね」などと、先を予想したり共感を呼び起こしたりするような働きかけをしてみてください。

身近なところにもアートはあります。絵本もそのひとつです。物語を読むとき、まだ言語の能力が不足している子どもは、絵本のように絵のついているもののほうが、登場人物に共感でき、感情を読み取る助けになるでしょう。

脳のしくみとはたらき

図1
脳の外側

前頭葉にある運動野は運動の命令をし、後頭葉にある視覚野は形や色を認識する。運動野は、他人の動きを見ているだけでも反応する。

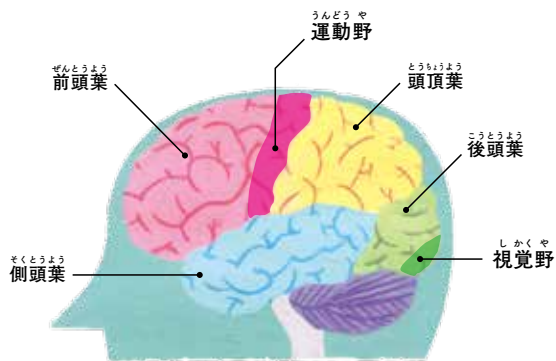
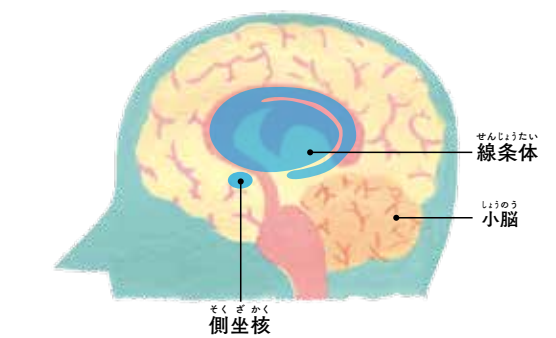


図2
脳の内側

絵を見て美しいと感じたときは、形や色の情報を処理する視覚野だけでなく、下図のような報酬系と呼ばれる部分も活発に働く。



「感じること」と 「表すこと」を繰り返して 豊かな表現力を身につける

子どもたちは、感じたことをさまざまな方法で表現していきます。その中で、色や形で表されるものが絵や工作などの造形です。保育者は豊かな表現を育むために、どのような環境を整えてあげることが大切なのでしょうか。

活動を広げるものを 予測して環境を整える

「感じること」は、誰に教わるでもなく、子どもが生得的にもっている欲求ですが、「表すこと」も同じです。「感じること」によって、「表したいこと」が生まれます。キャラクターの絵ばかりを描く子どもは、キャラクター以上に興味をもてるものがないのです。生活の中で何かに深く関わる活動をすれば、さまざまな思いや願いが生まれ、表現につながっていきます。まず、子どもが全身で「感じる」ことのできる活動をするのが大切です。

雪が降ると、子どもたちは園庭に出、雪を手でさわわり、冷たさや感触を確かめ、雪玉をつくったり足跡をつけたりします。ある園では、子どもたちが雪遊びを十分楽しんだあとに、色画用紙と白いクレヨンを用意しました。すると、子どもたちは雪の絵を描きに集まってきました。またある園では、風の音を聞く散歩を子どもたちに提案しました。風の音を十分感じとった後で、手書きの五線譜を用意すると、楽譜を知っていた子どもたちは、さまざまな風の音を五線譜に描きはじめました。そして、セミ、電車、エアコンの室外機の音など、自分の聞いた音を五線譜に表現する活動に広がっていました。子どもたちは、「感じたこ

と」を「表したい」ときに、表現を豊かに広げる材料と出会えたのです。保育者が子どもの活動を広げるものを予測し、環境を整えることで、子どもの豊かな表現力を育ていくことができます。

いろいろな 画材や素材を用意する

材料は年齢に関係なく、クレヨン、絵の具、糊、葉っぱなど、いろいろなものを用意しましょう。0〜2才頃は、画材を「もの」として接します。糊も紙を貼るための材料ではなく、ひとつの物体として見ます。クレヨンは視覚的な魅力で使い、描

きながら徐々にイメージを生起させ、色や形を生み出します。初めは絵の具を手や指につけ、感触を楽しみながら描いたりもします。材料との一体感を感じ、心を開き、「表すこと」の欲求をより強くしていくでしょう。3才頃には、出来事とイメージが結びついてきて、4〜5才になると、どんな材料が必要かを考えて描くことができるようになります。

できた作品に対する アプローチ

子どもが絵や工作などをつくった

ら、まずは、丸ごと受容することが大切です。子どものつくるものには、何らかの形で気持ちが現れます。母親の顔を描いて、黒く塗りつぶしてしまう子どももいますが、そこには、何らかの理由があります。どんなものでも決して批判せず、しっかりと受け止めます。「この絵にお話があったら聴かせて」などと声を掛けて話を聴くと、子どもの気持ちを理解するヒントを見つけられることができます。

次に作品の評価ですが、ただ「うまいね」「素敵だね」といった褒めかたではなく、具体的にどこがいいのかを伝えましょう。「元気な太陽が描けたね」「色の組み合わせが素敵だね」などと、評価の基準を具体的に示します。自分をしっかりと見てくれている人に認められていると実感することで、子どもの自己肯定感を育むことができます。子どもは、生活の中で絶えず「感じること」と「表すこと」を繰り返しています。大人ができることは、豊かな表現力を育む環境を整えることです。大人概念に沿って描かせたのではなく、子どもに任せた主体的で生得的な活動こそが、子どもの表現力を豊かにしていくでしょう。

表現するための環境

場所 PLACE

子どもたちがいつでも自由に使えるように、保育室に専用の棚やワゴンを置いた例。



教室や保育室の隅に、描画をすることができるコーナーをつくらせておくと、子どもは描きたいと思ったときに、いつでも描くことができます。専用の棚やワ

ゴンなどを用意して、さまざまな大きさの紙や、クレヨンや絵の具、ペンなどは色数を揃えて常時置いておくと、使いやすいでしょ。

材料 MATERIAL

屋外で、画用紙に向かって色を付けたシャボン玉を吹いてアートをを楽しむ子どもたち。



画材や素材などの材料も、環境のひとつです。大きな紙と太い筆があったら全身を使って、小さな紙とペンがあったら細かな絵を描きたくなります。容器に

入れた色水や、木の実や葉っぱなどの素材も、創作意欲をかき立てる材料になるでしょう。子どもが表現するものを想像し、材料を用意することが大切です。

ゆびえのぐ WHG-8 8色セット

出しやすく、
安全性が高い！



せいさくクレヨン クリアラベルプラケース入 (16色)

発色がよく重ね塗りも
できます



室外機の音を
五線譜に描いたよ

手や指で絵の具を
塗ると気持ちいい！

海岸の散歩で拾った
ものも貼ろう！





色鮮やかに 画面を 切り取る 蜷川実花さんの世界

子どもたちに日常の中で、優れたアートに触れさせてあげたい、ジャクエツは、そんな想いをこめて
長年、園に飾るアート作品を提案してきました。
今年、新しくご紹介する作品のひとつに、
写真家、蜷川実花さんの作品があります。
蜷川実花さんは、その大胆な構図と色鮮やかな作品で、
若い世代を中心に幅広い層から絶大な人気を集めています。
画面を切り取る視点や独特の色彩感覚に
見ているだけで、つい引きこまれてしまいます。

アート作品の鑑賞に、特別な指導はいりません。
子どもたちには、蜷川実花さんの世界で自由に遊ばせてあげてください。
素晴らしい作品がいつも身近にあり、
多くを感じながら成長することは、
子どもたちの人間性を豊かに育んでいくことにつながると
わたしたちは信じています。

CREATOR'S PROFILE
蜷川実花 (にながわみか)
写真家・映画監督
木村伊兵衛写真賞ほか数々の賞を受賞。
また、映像作品も多く手がける。2007年、
初監督映画『さくらん』公開。2008年
に個展「蜷川実花展」が全国の美術館
を巡回し、のべ18万人を動員。2010
年、Rizzoli N.Y.から写真集「MIKA
NINAGAWA」を出版、世界各国で話題
となる。2012年、監督映画『ヘルター
スケルター』公開、22億円の興行収入
を記録。2020年東京オリンピック・パ
ラリンピック競技大会組織委員会理事就
任。二児の母でもあり、ベビー&キッズ
用品メーカーとのコラボレーション作品
なども手がける。



サイズ：B2 (485×728mm)
価格：320,000円 (税別)
※全品共通です

新学期用品の「あゆみ」や「じゅうが」でおなじみ

SATOE
TONE'S
ART WORK

やさしい世界観で人気の絵本作家
刀根里衣さんの作品



くじら飛行船



もうすぐ春がくる



にんじんハンター



あじさいの夢

サイズ：6号
価格：270,000円（税別）
※全品共通です

JAKUETS